

山中雑信

一

伏園兄：

今月初めにはもう退院し、山の中に引っ越してきました。香山はそれほど高くはありません。まるで故郷の城内の臥竜山ほどですが、北京の近郊にあるので、それだけで好い山ということになるのでしょう。碧雲寺は山腹にあり、場所はすこぶるいいのですが、わたしはまだ外へ出て見たことがありません。というのはお医者<sup>ちやんちん</sup>の再診を待って、どういう風に行動するかが決まるからです。それにこのところ連日の雨で、庭の中さえ歩けず、終日部屋の中で起居するばかりです。大雨が二日も続き、気温もずいぶん下がりました。般若堂には和尚が何人か住んでいて香椿の葉を買い込んで、筵に干して乾かしているのが、この二日の雨で乾かないばかりか、逆にもっと湿らせてしまいました。ガラス窓から覗くたびに、廊下にしっとり水気を含んだ深緑の香椿の葉が並べてあって、ここの和尚たちに対して心に何だか済まないような感じになります。——雨が降るのはわたしのせいではありませんが。

般若堂では朝晩和尚の勤行がありますが、決して煩いとは思わないどころか、わたしにとっては覚醒の力があるようです。朝まだきと黄昏の澄んだ磬の音は、まるでわたしたち信仰なく、帰依するところのない人間に、前向きに精進する道を選べと促しているかのようです。わたしの最近の思想の動揺と混乱とは、すでに極まったと言うべきで、トルストイの無我の愛とニーチェの超人、共同生活主義と優生学、ヤソ・釈迦・孔子・老子の教訓と科学の例証、わたしはいずれも同じように好きで尊重したいのですが、また調和統一して、一筋の実行可能な大道に仕上げることができません。わたしはこうした様々な思想を、乱雑に頭の中に積み上げているだけで、まったく田舎の万屋の店です。——あるいは世間には本来思想上の“国道”などというのは、ないのかもしれない。この事をわたしはいつも考えていますが、今彼らの勤行を聞いて、もっと刺激を受け、彼らと比較すれば、まるで上海の多くの国籍を持った西洋商人の中に、挟まった“拘束する領事のいない”西洋人のようです。拘束する領事がないのは、結局いいのか悪いのか、わたしには考えてもわかりません。あなたはどう思われますか。

寺内の空気は外に比べて穏やかというわけではありません。わたしが来る一日前には、般若堂の和尚が一人、方丈の小遣いに捕まり、寺内の法物を盗んだということで、まず打たれた後、縛られて城内の何とかいう役所に送られました。結局物を盗んだかどうかは、別問題ですが、打擲はおそらく仏家がやるべきことではないでしょう。たぶんいまの仏教徒の戒律は、やはり“儒業”の三綱五常と同じで、とっくに空文句になっているのでしょう。自分が永遠に追放を受ける波羅夷の罪を犯そうとも、構うことなく、ただ他人を処罰できる権力を手に入れさえすればよいのだ、ちょうど名教護持する人間がその老父を打っても、世間では少しもおかしいとは思わないように。わたしたちの厨房の隣には、二人のサイダー売りが住んでいて、しょっちゅう喧嘩しています。主人が家に帰ると、二人少年の丁稚が残り、それに連日の雨ときて、店を展げに出ることもできない、だからたやすく悶着が起こる。前の晩には、彼らはどちらもご飯を作りたくな

く、互いに押し付けあっていて、始めは罵り合っていたのですが、ついにはそれぞれが竈用の十能を取り上げて、相見えること二度。彼らの怒鳴り声を聞いていて、『三国志』や『劫後英雄略』〔アイバンホー〕などに記された英雄の戦いや腕比べの時の威勢を連想しましたが、後で戦い終わってみると、彼らは二人とも何の怪我もしていないのは、もっと不思議なことでありました。この二つの事柄から、山上の戦場気分がお分かりになるでしょう。

病気は右の肋膜にありますので、筆を執るのにずいぶん不便で、この手紙も四度に分けて書きました。後はまたにしましょう。 一九二一年六月五日

## 二

このところ天気がだんだん暑くなってき、山に来て滞在する人も増えてきました。向かいの三間間口の部屋は、前日に貸し出され、たぶん近日中に越して来るのでしょう。般若堂の両脇の部屋は、もとは“十方堂”だったのが、その大きな木の額は今でもわたしの部屋の門口に掛かっています。でもいまは両方とも人に貸されて、これから遊行の僧が来たら、羅漢堂に行って座禅を組んでもらう他に、別に泊まるどころがなくなってしまいました。

三四日前正殿の小さい菩薩像が二体なくなり、方丈は正殿を見張っている和尚が盗んで遊客に売ったのだと言って、そこで又も縛り上げ、打擲しましたが、今度はお上には送りませんでした。というのは次の朝彼が後ろのお堂で大木魚を叩いているのを見たからです。（この前捕まった和尚は、もう出て来て、別のお寺に越して行きました。）その時わたしはちょうど『諸経要集』六度部の「忍辱篇」を読んでいて、道世大師が“……豈に微かに脳を蝕する有りて、大いに瞋恨を生じ、乃ち角眼もて相看、悪声励色、遂に杖木を加え、恨みを結び怨みを成すに至るを容れんや”とあるのを見て思わず苦笑しました。あるいは大寺院の規則では、方丈はもともと棒で人を打つことができるのかもしれませんが、わたしにはどうも矛盾しているように思われます。しかももし本当に規則に照らしてやるのなら、おそらく打つべきものは、このいわゆる小菩薩を売り飛ばした和尚ではないのではありませんか。

山中のハエの多さと来たら、全く“人の意表の外に出ます”。いつも午後になると、窓の外を群飛し、ブンブン声を上げ、まるでミツバチの分封のようです。わたしは扉の換気口に寒冷紗を貼り、きっちり閉めますが、出入りするたびに、何匹かは部屋に紛れ込みます。それぞれの机にはハエ取り紙を置き、別に棕櫚で作ったハエたたきで叩きますが、やっぱり絶滅することはできません。イギリスの詩人ブレイクに「蠅」という詩があり、ハエを無常の人生と比べています。日本の小林一茶の俳句には、“やれ打つな、蠅が手をする足を擦る”と言います。わたしはいつもそれらを愛誦していますが、実際にはそんなふうには行きません。一茶にはもう一句あって、その序に言います。

風にくさに捻りつぶさんもいたはしく、又草に捨てて断食させんも見るに  
忍びざる折から、鬼の母に仏のあてがひ給ふこと思ひけるまゝに

（シラミを一匹捕まえて、捻り潰すのはもちろん可哀そうだが、外に捨てて、

絶食させるのも忍びない。ふと我が仏様が以前鬼子母にお与えになった物を  
思いつき、そうした。）

わが味の柘榴に這す虱かな<sup>i</sup>

四分律には次のように言います。“時に老比丘の虱を捨て地に棄つる有り、仏言うしかす応きにあらず、聴すに器を以て棉の若きを盛り捨て中に着せ。若し虱走り出づれば、応に筒を作して盛るべし。若し虱筒を出づれば、応に蓋を作りて塞ぐべし。その寒暑に随いて、加うるに膩食を以て将に之を養うべし、と。”一茶は信心篤い仏教徒だからそうしたのでしょうが、柘榴を食べさせたところがもっとすばらしい。こうした殊勝な思想はわたしも美しいとは思いますが、わたしの心の底には矛盾があって、一方ではハエがわたし同様生命を持った衆生の一つだと認めるものの、一方またその脚には有害な黴菌がいっぱい付いているに相違ありませんし、頭や顔を這えば煩くてしょうのない、憎むべき虫であり、それを殲滅したいと思っています。この情と知の衝突は、実に調和のしようがありません。わたしは篤く“賽老先生〔サイエンス〕”の言うことを信じていますが、彼のメスによって詩人の美しい世界を破壊しようとも思いませんので、この点では、甘んじてしばらくはコウモリ派になるしかないでしょう。

時事についての感想は、非常に混乱していて、全くどこから話していいのやらわかりませんので、やっぱり言わぬに越したことはないでしょう。

六月二十三日

### 三

わたしは第一信で、寺内は戦場の雰囲気がとても濃厚だと言いましたが、今では状況が変わりました。サイダー売りの戦士の一人は、すでに下山しました。その由縁は、話せば長くなります。前の二回の日曜日は、遊山の客が多く、サイダーは一日に十何円かの売り上げだったのを、方丈が知って、彼らをいちばんよい場所の“泉”の辺りから撤退させ、自分で商売を始めました。彼らは荒れ果てた塔頭の下や門口に店を展げるしかなく、商売は上がったりで、主人はそこで人減らしを実行し、一人だけを助手として残しました、——この丁稚はもともと墨汁入れを作っていたもので、主人自身は左官でした。この主従は、時に言い争いをしますが、開戦までには至りません。方丈はどうも配下の和尚を打擲するのが好きなようですが、彼の法廷はわたしのところからは遠く、まだ直接の影響は受けていません。このほかたまに和尚たちが高粱酒に酔っ払って、声を上げて抗弁したり、お金の勝負で揉め事があつたりしますが、いずれもすぐ落ち着いて、大事ということにはなりません。したがって般若堂の空気は、近頃はとても長閑かで気楽で、いらいらすることもなくなりました。この状況は気持ちではわかっても、一口では伝えにくく、いま一つ象徴的な些事を挙げますので、あるいはその大体をお分りいただけるかと思います。わたしたちの中庭には、全部で五、六羽の鶏がいます。その中には雄鶏もいますし、雌鶏もいます。これは和尚たちが共同で飼っているものなのか、一人の私有物なのか、わたしは知りません。彼らは昼間は藤の花の下にいて、夜は入口が小さく腹が膨れた、香油を入れる瓶そっくりな藤づるで編んだ籠の中に入れられます。この籠には蓋がないようで、わたしは毎日それが

柏樹の木の下に天を向いて口を開けたまま置いてあるのを見ます。夜の七時ごろ、和尚たちの太鼓打が終わったのでしょうか、各自が休息に行くと、籠の鶏が変な声で鳴き始めました。そこで禅房の和尚の“シッ、シッ——”という声が続いて起こりました。こうしてそれ以後は籠の中も禅房も静まり返り、夜明けになるまで、何の騒ぎもありませんでした。何事かと訊くと、イタチがきて鶏を噛むのだという答えです。しかしこの入り口が小さくて腹が大きい籠には、イタチは入ることができません。もし入り込めば、逃げられなくなってしまいます。たぶんイタチは忘れられず、しょっちゅう来ては様子を伺い、いささか気を紛らしていただけないのでしょうか。もし籠に蓋があったら、——上に述べたように、たといなくとも、安全なのですが、——イタチが伺いに来ることもなかったでしょうが。だが和尚たちがいつまでも蓋をしないので、イタチもいつまでも様子見に来るということになって、“三日に二回”の籠と禅房との角逐が起こることになります。これがわたしの言う長閑かで気楽の理由です。わたしはこの物語が、長閑かで気楽という抽象的な言葉よりももう少しうまく説明できますようにと願っています。

しかしわたしはここでずっと長閑かで気楽ではられません、一日のうちどうしても憂鬱な時間があるのです。つまり午後清華園の郵便配達が新聞を持って来てからの半時間です。わたしの神経は衰弱していて、刺激を受けやすく、特に病後はひどいのです。ちょっと重大な問題について、少し考えますと、すぐいらいらが起り、ほとんど発熱状態に近く、そのためふだんは十分用心して避けているのです。しかし毎日の新聞には不愉快な事が充満していて、読めばどうしても気が気ではありません。そうなら、見なければよいのと言う人もあるかもしれませんが。だがわたしは又見ないでは済まないのです。体に傷を負った人が、触ると痛いとわかっていながら、時々思わず手で触ってみて、新たな激痛を感じ、自分が傷を受けたという意識を保つようなものです。しかし苦痛は結局苦痛でしかなく、慌てて手を離し、別の慰めを求めます。わたしはその時新聞をおいて、自分の考えをふだん通っている道に戻そうと努力します、——最近本で見た大乘菩薩の布施・忍辱など六度の難行や、浄土及び地獄の意味、あるいは遊客や和尚たち（特に方丈に注意）の軼事をさがしたりと。わたしも不愉快なことはもう言いたくはありませんから、次にもやはりあなたに彼らの事を話すに越したことはないでしょう。 六月二十九日

#### 四

最近神経の調子が悪く、夜は睡眠不足で、気持ちがとても落ち込んでいますので、長らく手紙も書けず、詩も作っていません。詩想はむろん湧かず、何日かまえ正殿へ行って御碑亭を見ましたが、わたしの詩興をおおいに減じました。碑亭の北に二つ石碑があつて、四面には乾隆御製の律詩と絶句が刻まれています。これらの詩はとても凝って石に刻まれています。壁上には憲兵の某君の題詞もあつて、皇帝を賛嘆して“天命乃ち移る有るも、英風殊に泯びず！”と言っていますが、それを見てなぜだかかの塾師が冷于冰に読ませた草稿を連想してしまい、わたしの創作熱を零度近くまで減退させました。以前わたしは病中に突如野心を起こして、二篇の小説を書こうと思いました。一篇は『平凡な人』と言ひ、一篇は『初恋』というものでした。幸い今にな

ってもまだ手を着けていません。でなければ「饅饅の賦」を一人ぼっちにしないばかりか連れまで付けてやることになりましょう。

わたしは前回あなたに遊客の話をするを受け合いましたが、まだ今でも約束を果たしていません。というのは彼らはみな正門から出入りして、般若堂まで来るのはとても少ないのです。わたしの窓の外を通る遊客を見ましたが、全部で十何人しかいません。彼らには一つ共通した特色があります。どうやら植物の年齢にすこぶる興味を持っているようです。彼らはたいてい和尚か他の人に、“この藤は何年ぐらいですか？”と訊きます。答えは“それは分かりません。”そこで又“この柏樹は？”答えは、むろん相変わらず“分かりません”です。柏樹でなければ、槐樹を訊く者もいます。そのほか胡桃とか柘榴などの小さい樹は、注意する人がいます。わたしはいつも不思議に思うのですが、彼らがこんなに熱心なのに、寺の人間はどうしてそれぞれの老樹にいい加減でもいいから年を決めてやらないのでしょうか。和尚たちにお手本通りに答えさせるか、あるいは大きな木の板に書いて、樹下に掛ければ、一挙兩得ではありませんか。

遊客の中にたまたま鳥籠を提げたのがいますが、わたしはこれが大嫌いなのです。わたしにはふだんから偏見があり、不必要な悪事をなすものは、生活に迫られて、已を得ず悪事をなすものよりもずっと憎むべきであると思います。だからわたしは蓄妾する男を憎みます、娘を妾に売る——貧窮のために人肉を喰らう父母よりも何倍も。鳥籠を提げた人に対する反感も、同一の源流から出ます。もし肉を食うなら、食べればよろしい（じつは飛鳥の肉は、養生の上でも決して必要ではありませんが）。もし鑑賞するなら、自由に飛び回り鳴いている時に、できるだけ見たり聞いたりすればよろしい。どうして籠に閉じ込めて、提げて歩く事があるのでしょうか。これは纏足を好むのと同じようなもので、苦痛の賞翫であり、一種の変態的な残忍な心理だと思います。賢首は『梵網戒疏』の「盜戒」下の注で、“善見は言った。空中の鳥を盗むのは、左の翅から右の翅まで、尾から頭まで、上下も同じく、ともに重罪を得る、と。この戒に従えば、たとえ持ち主がなくとも、鳥自身が持ち主であり、盗むのは皆重罪である。”鳥自身が持ち主である、——この言葉の精神はなんと博大深厚なことでしょう。しかしながら又どうして鳥籠を提げた連中に理解されるのでしょうか。

『梵網經』にはまだいくつか、わたしがとてもよいと思う言葉があります。例えば“もし仏子であるならば、肉——一切の肉は食うことはできない——を食えば、大慈悲の種を断ち、一切の衆生はそれを見て捨て去るであろう”と。又云う“一切の男子は我が父であり、一切の女人は我が母であり、我が生々はみなこれから生を受けている、故に六道の衆生は皆我が父母である。しかるに殺して食うものは、すなわち我が父母を殺し、亦我が故の身を殺すことである。一切の地の水は、我が先の身であり、一切の火風は、我が本体である。……”わたしたちはいまではもう六道輪廻の説を信ずることはできませんが、しかしこの普遍的肉親観・平等観の思想は、やはりそれが真実でかつ美しいと感ぜられます。イギリスのブレイクの詩に、

“狩られるうさぎが鳴く一声ごとに、  
脳神経が一本裂けてしまう。  
雲雀が翼に傷を負わされると、

天使が一人歌うことを止める。”

これも同じ思想を表しています。わたしたちは自分の養生のために、あるいは已を得ず殺生をします。しかし大慈悲の種も保存しなければなりません。だから無用の殺生と快樂のための殺生は、ともに避けるべきです。たとえば酔蝦を食べるのは仕方がないでしょう。しかしその新鮮さを貪るわけでもないのに、ただ生きている蝦を挟んで、口に入れることができるだけで、心に“食ってやったぞ！”と思い、愉快を感じずる人がいます。これはそうしてしてやったりという快樂の味を貪るだけで、ほんとうに食べることはありません。『晨报』の雑感欄に松年先生の「愛」という一篇が載ったことがあります。わたしは彼の言うことにとっても賛成です。しかし物を愛することも人に仁なることと大いに関係があつて、もし大慈悲の種を断つてしまえば、たとえばかの酔蝦を食べる人は、人を愛することにおいてもおそらくそれほど円満であるわけにはいかないでしょう。

七月十四日

## 五

このところとても暑く、屋内の午後の気温は華氏 90 度以上です。それで晩になると、般若堂の中庭で寝る人が、きまって三、四人にもなります。彼らの寝方はとても奇妙で、蚊や白蛉が刺しにくるので、布団を頭からかぶるのです。そうすると、もちろん蚊どものたかりはもう心配ありませんが、露天で寝る意味が完全になくなってしまいます。涼しさと言うのに、布団をかぶり、通気と言うのに、頭から布団の下に潜るのですから。それでは暑くて息苦しい屋内で寝るのと同じこと、なんの違いがありません。ある方丈の弟子は、籐の椅子に寝て、サラサの帳を掛けました。わたしは蚊よけのためだと思いましたが、なんと四面がガラ空きで、蚊どもは地面から一二尺は飛べますから、相変わらず中に入れるのです。彼の帳は上から落ちてくる蚊を止めることしかできません。こうした奥妙なやり方は、なかなか禅味があるようですが、わたしには理解しかねます。

わたしの行動範囲は、最近もう東側の“泉”まで伸びました。ここは確かによく、毎朝早く、遊客のないときに、しばらくぶらついて、山水の美を鑑賞します。ただ残念なことにあまりきれいではありません。道々とても臭いのです。——『本草』のいわゆる人中黄がたくさん陳列してあるからです！中国はほんとうに奇妙な国だと思います。そこでは人々はなかなか栄養を得られないし、またその排泄物を処理する方法もないのです。先祖の軒轅が初めて中国に入ったときも、おそらくこういう状況であつたと想像します。しかし今ではすでに四千年が経ちました。まさかこうした状況がほんとうに四千年持ちこたえ、少しも改められたことがないのでしょうか？

泉の西側の石の階段の上は、天然の療養院と、付属のいわゆる洋風厨房です。門外には一本白楊樹が植わっていて、幹は太く、およそ直径六七寸もあり、白い皮がまだらで、なかなか美しい。その葉は大風がないときでもさらさらと音を立て、まるで魔法のようです。古詩に“白楊悲風多く、蕭蕭として人を愁殺す”と言いますが、白楊を見たことがない人には、あまりその趣味は理解できないでしょう。ヨーロッパの伝説では“イエスは白楊の木十字架に磔にされ

た、だからこの木はそれ以後永遠に震えているのだ”と言います。……わたしがちょうど白楊についてさまざまな空想を巡らしていると、七八歳の西洋人の子どもが寧波の女中について洋風厨房に入ってきました。その女中がコックと話をしていると、突如二人の広東人の子どもがやってきて、それぞれ手を上げて、西洋人の子どものほおを立て続けに打ちました。両頬はたちまち真っ赤になりましたが、その子は無抵抗主義を守り、打たれるに任せました。わたしの使用人が見かねて、彼らを二度も引き離しましたが、その二人の攘夷の勇士はまたもや突進し、打とうとしました。打たれた方は我慢していましたが、連中はわたしが今しがたまで浸っていたロマンティックな考えをどこかに吹き飛ばしてしまい、切実に現実の痛さを感じさせました。——この二人の小愛国者の行為について、もしわたしが批評するならば、過激なことになるのを避けられませんか、これ以上言わないことにします。

毎日夕方には碑亭の下に散歩にゆき、ついでに乾隆の御製の詩を拝読します。碑には全部で十首あり、少なくともいつも二首は読みます。それを読んで久しいですが、様々な感想を持ちました。その一つは口語詩の発生<sup>きこくご</sup>のやむを得ることと必要性です。御製の詩にこんな詩句があります。たとえば“香山は適才<sup>しきさい</sup>白社に遊び、越嶺して便ち以て碧雲に至る”や、また“玉泉十丈の瀑、誰か此其の源を識るや”など、どれもあまり上手ではなさそうですが、これは実際旧詩の難しいところでして、皇帝を責められません。対偶だの、平仄だの、押韻だの、拘束が非常に厳しいので、天を奉じ命を承けた真龍<sup>しんりゅう</sup>でさえもどうすることもできません。ただ幾らか戯れ唄の痕跡を石の上に残すことができただけです。もし彼が今の時期に生まれていたら、七絶や五律は放り出して、比較的自由的な新体詩を作ったでしょう。たというまく作れなくとも、“<sup>あに</sup>哥の罐を<sup>こね</sup>焉を聞いて嫂棒にて傷る”の種本だと思われるようなことはなかったでしょう。だがここまで書いて来て、突如『大江集』<sup>ii</sup>などの名著を思い出し、また自分が述べたことが必ずしも正しいわけではないとも感じました。たぶん文言によって“哥罐”を作るものは、白話で作っても相変わらず“哥罐”であると、——そこでわたしはまた一つの疑問を持ちました。これは取りも直さず口語詩の“万応”の問題ではないかと。

七月十七日。

## 六

長らく手紙を書きませんでした。その理由は、一半はあなたの出京のため、一半はわたしに何も言うことがないためです。わたしの考えは実際混乱を極めていて、多くの問題について考えなければならぬのに、どれも同じように結論が出ない、それで言うべきことは多いと思うのですが、どう言ってもいいかわからないのです。今では放っておいて、無理に纏めぬことに決めました、しばらく本でも読んで、暇つぶしをするのも、致し方ありません。

先月わたしは二度香山へ行きました。二度とも四人担ぎの籠で行ったのです。わたしたちが故郷にいた頃は、四人担ぎの籠は知事しか乗れないことを知っていました。それがいま自分は二度も乗ったのは、やはり“意表の外に出た”と言うほかありません。わたし一人が彼ら四人に担がせて、いささか申し訳ないようで、しかも分ければ各人二角あまりしかなく、彼らにとっても実

に不経済です。なぜ二人に減らさないのかわかりませんが、その籠は杉の木で出来ていて、歩き出すと非常に揺れるのです。たぶんこの籠は候補道のような身分でないと、それほど合わないでしょう。わたしが行ったのは甘露旅館で、二人の友人がそこに泊まっていたので、他所には行ったことはありません。何とかいう名勝は、督辦夫人が住んでいるとかで、行くことができません。これは何の督辦か、参戦と辺防の督辦はもう廃止になったのではないかと言うと、水災の督辦だという答えでした。たしか四、五年前に天津一帯は一度水災がありましたが、今では当然乾いています。しかも干ばつで騒ぎになっているのです（天津ではありませんが）。友人は、中国では水災はあり得ない、黄河は決して決壊しないよ、と言います。これは確かに間違いありませんが、水災督辦はまことに存在の必要があって、中国の状況から見れば、おそらく官制に入れなければならないでしょう。

甘露旅館で一冊『万松野人言善録』を買いました。<sup>iii</sup>この本は出てからもう何年もなるのに、わたしは初めてみました。実を言いますと、英先生の議論については全く賛同するというわけにはいきません。だがこれはわたしの長年にわたる感慨を引き起こし、中国の人心を一新するには、キリスト教が実際にとっても適当だと思いました。ごく少数の人は科学・芸術あるいは社会的運動で、宗教的要求に代替することができるでしょうが、大多数にとっては不可能です。最もよいのは科学を受け入れることのできる一神教でもって現在の野蛮で残忍な多神——実は拝物——教を打倒することだと思います。そうすれば民智の発達にも少しは希望が出てきます。だがどうしてもしっかり守らなければならない二つの大きな条件があります。その一つはこの新宗教の神は絶対に古い神の観念と同化して、洋服を着た玉皇大帝になってしまわないこと、その二は絶対に教閥を作って、自由思想の発達を妨害しないことです。この第一第二の前車の轍は、西洋の歴史に実例がたくさんありますから、全力を挙げて踏まないようにしなければなりません。——しかし、わたしたちの混迷した国民はながらく誤った信仰の暗闇にいましたから、智慧の光の輝きを受け入れられなかった以上、この新しい宗教の灌頂を受けようとするでしょうか。伝統に囚われない大公無私の新しい宗教者が、国内に何人いるでしょう。よく考えると、わたしの理想は空想に過ぎないのかもしれませんが。これから国民の心を主宰するものは、相変わらずかの鬼神妖怪の一群なのでしょう！

わたしの行動範囲が寺外に広がったからには、寺内の各所もみんな行きましたが、松籟が聞けることで有名な塔の上だけはまだ行っていません。しかしふだんの散歩は、きまって御詩碑の近辺と弥勒仏が鎮座まします右側の道だけです。この泥の道は往き返り百歩ばかりで、歩きながら階段下の龍の口からもれる潺湲たる水の音を聞く（これがつまり御製詩にいう“清波砌を繞りて湲たり”）のは、とても面白いです。ですがこの清波は時に“湲たり”ではなくなって、その時は全く人をがっかりさせます。裏で誰かがそれを止めているからです。これは誰がやっているのか、わたしは知りませんが、おそらく金魚池かなんぞの金持ちたちでしょう。連中は池に水を入れようとするので、水汲みの人は待たねばならないか、あるいはご苦労にも泉にまで出かけねばなりません。まして水音を聞こうとするものなど問題ではありません。この清波のそばの朱門も、たぶん金持ちなのでしょう。というのは彼らが引越してくる二、三日前に、多くの貧乏人



が頭に多くの大きな安楽椅子や小さな安楽椅子を載せて入って行くのを見たからです。以前絵を描く西洋人が住んでいた頃は、立ち入り禁止などなくて、東北の隅の塀も崩れていて、わたしはよく中に入って向かいの山の景色や谷川で洗濯する人々を眺めたものでした。いまではしかし全く違ってしまいました。塀を倒し新たに築き直して、本当の山を門外に締め出し、中ではたくさん石を積ませて、（石を担いだ人たちは、まるまる三日、わたしの窓の外を絶え間なく通っていきました）築山と言ひ、一方弥勒仏の左側の道には土壁を築きました。そこでわたしには本当の山はもちろん、築山さえ見られなくなりました。こうした金持ちたちは周囲に囲いがなければ人は住めないと思っているようです。香山の上うねうねと続く垣根を遠望して、わたしは秦の始皇の万里の長城を思い出し、自分の推測が決して全くの証拠なしではないと思いました。

まだ他に見聞があつて、西山小品二篇を書いたことがあります。一を「ある郷民の死」、二を「サイダーを売る人」と言つて、それを中に入れるつもりです。しかしそれは日本の友人がやる雑誌のために書いたものですが、いま原稿を残してあるので、自分で訳したら発表できます。 <sup>iv</sup>

九月三日、西山にて。

※初出：1921年6月7日・6月24日・7月2日・7月17日・7月21日・9月6日

『晨报』第7版。

---

<sup>i</sup> わが味の柘榴に這す虱かな 一茶『八番日記』（原注）。日本の伝説では、仏が鬼子母神を懲らしめて、ザクロの実を与えて、人肉の代わりに食べさせられた、ザクロの実の甘酸っぱさが人肉に似ているからだという。『鬼子母経』によれば、彼女はのちにお産の神になったというから、このザクロはおそらく多子の象徴に過ぎないだろう。

<sup>ii</sup> 『大江集』 陳口撰 又『大江草堂集』とも。未詳。

<sup>iii</sup> 『万松野人言善録』 英華撰 英華（1867-1926）字は斂之、万松野人は号の一つ。旗人。クリスチャンとして知られる。天津『大公報』の創始者であり、輔仁大学の創設者でもあった。いま『英斂之集』（広西師範大学出版社刊中国基督宗教資料叢刊）に影印が見られる。

<sup>iv</sup> 「西山小品」 中国訳は『散文全集』第2巻所収。日文稿は『北京週報』に載ったほか、のちに松枝茂夫氏訳『周作人随筆集』（改造社）に転録。